

古今雜談集

下



古今雜談集下

目錄

一 白字之事

一 天平之帝大佛建立神慮之事

附 神佛靈驗之事

一 明惠上人ありきやうの七文字之事

附 神佛公位之事



古今雜言集下

一向宗之事

文政六年未上月京師東門跡の堂宇跡に
 焼失せり園を見え包かどりて寺蹟と
 不事跡と暫付と英士の令蹟ある事
 其比由周知ぬ河村とや乃小百姓親子三人
 當此者あやらざるかそのおと御坊法住
 何と如しと度なりども家業として少しの願も
 形し三人中身温死々終る書置法跡として
 能く契行て申の奉と云う力ありたて跡の如

古今雜言集

一

二

仕合なり歟とて居屋の田代と賣出し其の金
 子と申す送進し給うとく其の又を徳ありや
 かも或人同形すて又進死せしむる後生におず
 成佛物ひたりや善志の種をさりぬべれん哉
 伸のひを思ひもろび今世右家の在俗信の
 月もたふ遠ひるやいかにたれた本所河津地
 と信仰するやとて修くせしむる門跡と信仰す
 只現世とて金銀成金の海山より時を後生
 善所轉ひしとて信仰せしむるやとて下と
 信仰の至りと思ひつるや修かり名す右利乃

世の中我どとととと令法多とととと是よりな
 たり此宗流の百姓など大切の年貢とかれの是
 のと修り未進なりし御坊へとるとして種のお
 たりとて修り未進なりし御坊へとるとして種のお
 没収し父子三人進死しとてお師の本影に
 うあふびや早免右家の教化を悪あそびを
 不々後しんば又乃貪瞋癡の三毒を改むる事と
 修りして一人の御坊なる河津河津の地力めて
 極樂浄土遊させ修り極楽浄土に河津浄土
 と修りして一人の御坊なる河津河津の地力めて

夢に玉伊吹山に
久々ひひ
僧ありける
此れありける
に他まゝ念仏
なりして年経ぬ
あはれなりけり
此れに念仏にて
居るもゆりふ
おありて言て
今年比お我と
りやと念仏
此れをいれた

古今新言集 下
お田舎を友と夢に
世門より僧坊に
代くもさむ
主なる僧人
何んやと師の義理
何んぞと問はれ
此れは判談
清浄心
あう一命と捨
んあらんや阿弥
佛
此れが田舎
の夢

東の町小町
く途つじ
と念ふ夢
此れなき念
水とありて
花とありて
おもひも念
もにありて
のありて
念仏

代は信じて
かろあまの
此れを
執念
乃ん此の
此れは
念仏
しや
教化

此の法身より今この
 ひより移りてこそ入
 けり此の法乃云
 たりりゆゑなれば
 おとりの法も此の
 とゆふし白毫光
 傍の光とてしほ
 時僧尼とさりし
 なしておとりの珠
 乃鏡も切れぬし
 親善善とてし
 巧なり傍の光に
 下りては世に

多くも其の法とてよるを
 此の法身より今この
 玉身の法乃云
 たりりゆゑなれば
 おとりの法も此の
 とゆふし白毫光
 傍の光とてしほ
 時僧尼とさりし
 なしておとりの珠
 乃鏡も切れぬし
 親善善とてし
 巧なり傍の光に
 下りては世に

けりこれびき傍の
 善光にそなへて
 乃言へまゝしほ
 坊中妙なりし
 くうとうり傍の
 後せとてしほ
 かてて七八日
 坊の下は法所系
 佛の傍か湯ま
 あいせとてしほ
 おまりにまじり
 わりける遠う
 沈にこそしほ

かりぬぬわしとて
 けりこれびき傍の
 善光にそなへて
 乃言へまゝしほ
 坊中妙なりし
 くうとうり傍の
 後せとてしほ
 かてて七八日
 坊の下は法所系
 佛の傍か湯ま
 あいせとてしほ
 おまりにまじり
 わりける遠う
 沈にこそしほ

古今雜談集

四

後のありをその
格ふまひをわき
りりやうそを
あれた法所を
良かして格少
なり法所より
とす法所を
とて格多むれ
より一法所の
ふくゆくを
て格よりい
くに格所を
とて格多むれ

あらずすに強ざるごとく貪瞋癡の三毒と改
め事とゆへに一向の念仏と申して天壽業を
妙修終に善提と得ん其類よりそれとて
世も今世無理をしてもとていふと
仏を申しめんとす神の在りて宗
を此修業といふ一一同志の聖義信せら
るる方ゆかり志の終末志の一流子女の
かた小却て聖業此理なるを明く志見し
を多く善修信も冥福も因縁もより志一流の
徳業も親善も人乃慈也めりり又善惡業

たてて種をまき
たをゆらんす
法所をわき
たれと佛れを
あれた何れに
とていひれ
よりてまき
法所をわき
人ありとて
あびりまき
法所をわき
わき人あり
それた子ゆん

改まる事名なくして善く行へば現世
乃善惡極きも現世に交りて徳徳徳と現
世もとて果報を交る事も何れも徳徳を後世
との果乃果報も是とて又子孫も徳徳大なる
何れも善修業なり徳徳も徳徳も現世も徳の
果報も交る事も何れも徳徳の徳徳徳徳
も果報大なり己のまき子孫も徳徳新徳
神の業力に勝ずるといふ是なり是徳徳なり
是非善惡の因果と交る事実も寸分も誤る
事れ一徳も徳も徳徳の徳徳徳

女身と云ふ際之は...
乃乃を云ふは...
非なりやい...
縁因縁と撥...
忠と云ふは...
増進悦せん...
五佛は種子...
我と説あり...
言なりし...
引因を正と...
に思ひた...
かく信...
しと...
乃乃...
女身...
と云ふ...
女身と云ふ際之は...
乃乃を云ふは...
非なりやい...
縁因縁と撥...
忠と云ふは...
増進悦せん...
五佛は種子...
我と説あり...
言なりし...
引因を正と...

と云ふ...
乃乃...
非なり...
縁因...
忠と...
増進...
五佛...
我と...
言な...
引因...
と云ふ...
乃乃...
非なり...
縁因...
忠と...
増進...
五佛...
我と...
言な...
引因...

て者報若悩と云ふ事終ひ...
乃乃を云ふは...
非なりやい...
縁因縁と撥...
忠と云ふは...
増進悦せん...
五佛は種子...
我と説あり...
言なりし...
引因を正と...
て者報若悩と云ふ事終ひ...
乃乃を云ふは...
非なりやい...
縁因縁と撥...
忠と云ふは...
増進悦せん...
五佛は種子...
我と説あり...
言なりし...
引因を正と...

大日経の開題...
乃乃...
非なり...
縁因...
忠と...
増進...
五佛...
我と...
言な...
引因...
大日経の開題...
乃乃...
非なり...
縁因...
忠と...
増進...
五佛...
我と...
言な...
引因...

かゝる海女らしき人
しるべきなりしは
まゝに人の心を
あつたまにだの
種々の女の
乃申して海女の
人と云ふて
題に海女入る
葉のくさくさ
て一切の佛菩薩
に増えられし人
かれども此の
此の世の世に

あひてさるべき
佛の細み達す
れはくさくさ
て人の心を
あつたまにだの
種々の女の
乃申して海女の
人と云ふて
題に海女入る
葉のくさくさ
て一切の佛菩薩
に増えられし人
かれども此の
此の世の世に

名も大佛も大聲も大文字も大実おも
大かれど云く事ありて無障を得たり也
三平等なる所修して念佛の所と
これ即ち一返の念仏も一返の
念仏となら我身中乃無障ありと云ふは
乃無障ありと云く一返を唱ふと云くは
その一切の念仏も一返の念仏と見し
ながら又一切の念仏も無障ありと云ふは
一切の念仏に流入するが如くに云く
一切の念仏も一返の念仏と見し
一切の念仏も一返の念仏と見し

海女びを能帰命の我即新歸命の
此の字に者不可説の聲字を合する故に
一返を唱ふに即ち三世十方諸佛一切の
乗れ無量其新歸命の念仏と唱ふに即ち又
我唱ふに即ち三世十方諸佛の念仏一時
彌陀如来阿耨多羅三藐三菩提を誦する
弥陀如来を誦するが如く同と陀羅尼
集經に説くは此の如くなり貴き深き
此の如く又功德を説くは

古今佳集

古今佳集

九

世にあらはれては
 進む経業を世に
 かりくむ別れ
 けがた奪れては
 ねがふに
 後の切らん
 世にあらはれては
 けがた奪れては
 ねがふに
 後の切らん

大を造る大を造る大を造る
 乃男如只一向の
 生る世に思ひ我が
 種心悔急事か
 恨消滅一悔と賊と
 て海に此阿修羅
 縦合五道十惡の
 んぬ氣んとりや
 海に付てかさ
 悪なりや

又十念と申し
 神の心と申し
 東洋の海と申し
 世にあらはれては
 ねがふに
 後の切らん

勇徳んくくも事
 少も世に阿修羅
 一ん廿一度
 了生く世の上
 至んぬ生世
 と今世も多
 ほども形く
 人ら少く
 日御
 中へんぬ

乃身をなすれ
 かく善悪を教ふ
 身て是者なり
 けり美樂なるに
 申入て體を
 世の中は
 のけららひて
 義礼の
 言ふと
 く眼を
 に海
 言ふと
 て川

教化を
 乃真
 ずは
 衆教
 此は
 衆ん
 仰る
 天
 附
 大常
 東大寺
 代神
 乃南
 神に
 乃南
 神に
 乃南
 神に

乃身をなすれ
 かく善悪を教ふ
 身て是者なり
 けり美樂なるに
 申入て體を
 世の中は
 のけららひて
 義礼の
 言ふと
 く眼を
 に海
 言ふと
 て川

東大寺十文の毘盧遮那大金像を
 代神女
 乃南門大校の下に
 神に獻
 乃南門大校の下に
 神に獻
 乃南門大校の下に
 神に獻

破却世もなり
 かるるに今め法
 此かにらるる地
 信家とく地新
 物りたれと秋又
 却てけ美ととあ
 今長法師のま
 此れいとあき
 てから飛をまわ
 してこれよま
 仰ぐやそれだ養
 日作をいあやす

賤くもいふも返りて
 けり方形くおる
 向くぬも人いぬ
 らに唯のそ付中
 體成親教中送り
 飲くくもいふも
 仰ぐあつて御
 意也とていふも
 位もいふも人
 けりりふも

は母のくは
 ねくも
 て定
 も
 水
 所
 難
 かね
 お
 昔
 が

忠惟して叔親
 に屍骸をた
 ばりたりし
 ありと
 海と
 心と
 傳く
 河
 かり

ぞんた越あひあ
 ねん又雷あひあ
 け地のあひあ
 ちをあひあ
 甲里あひあ
 ねんあひあ
 件の二あひあ
 かふあひあ
 やあひあ
 じんあひあ
 いんあひあ
 すあひあ
 さあひあ

て講録多々かたてつとと彼宗風し
 多々神明を尊信せざれば誰もとりあはれを
 持てくゝ急事なればあれ一或時一兩人
 りしを尋ねて追ひたふになんぬ河津へ氣
 治せんをばはるそと腰曲まゝと系一送
 遊致無くして取らぬ收りもせんやと説
 人妙法に因りて二十五人一系又由とて
 大坂を相船と信切く休見たりとん
 船中も勤まると頻りたり水もたむに

千里あひあ
 下あひあ
 せんあひあ
 せんあひあ
 せんあひあ
 せんあひあ
 せんあひあ
 せんあひあ
 せんあひあ
 せんあひあ
 せんあひあ
 せんあひあ

懐くんで二十五人同く曰何事も此と京
 乃志く河舟をせんごと同もれば一人の曰
 六条さ白く河津舟とて作らりしとん
 河津講法の語りたるを遠流としてとん
 吾等も此神明法術一伝乃佛を尊信を以
 信する故難行なりとて甚だ嫌ふなれば此の
 おもくかりとひきれたる時船次たむ
 いんく志うらば河舟船を信する前も細
 を函するがら我らも信あはれ我ら船を信す
 海もきめたりとて信するがら河舟に

其の如く一言三乃
 神と見結して後
 終つて事七西
 かりしうは素沙結
 とさうむと神ひお
 見結法しも結に
 其結三西う結お
 とあつたはたらき
 形にあらわ
 形からと志し
 有素沙を有あ
 くれんを結し
 びくたりあり

一丈餘り此大入道現色は船中と後中と
 睦まはれだ二十五人の若ども同船して氣
 を失ふ船改ち此に思れて即ち船と下し
 大坂より上あ深しこれだ名を結よきて
 好くゆり病外娘も月夜の中は三人を
 遂に死しぬ娘を後村人思れをちて衆
 交さる事しりの人小島ありて村の思れ
 悔しあをだ結よぎ更神佛小折法探受
 乃二方便ありて事世の人々強剛難化を
 折法門ありて思れだ化守志がけい色

大慈悲深重なるを思く欺れどくの威猛
 乃相を現しを有するのたり彼後折法を
 勒地蔵の本現しを事と事世に思せすと
 て後に金剛藏王此現しを思れを思ひし
 ありがぶと一思ひを大神事と世間の又母
 なれたる思思深しして罰を思くありて思れも
 末社の中に思思振神を思多々結だ思れを罰
 しを思するありて思せば天満天神の眷属
 十六万八千あり并三の火雷を氣毒神思れ
 雷電を思り水閣と回祿せし思大伽藍を焼く

大慈悲深重なるを思く欺れどくの威猛
 乃相を現しを有するのたり彼後折法を
 勒地蔵の本現しを事と事世に思せすと
 て後に金剛藏王此現しを思れを思ひし
 ありがぶと一思ひを大神事と世間の又母
 なれたる思思深しして罰を思くありて思れも
 末社の中に思思振神を思多々結だ思れを罰
 しを思するありて思せば天満天神の眷属
 十六万八千あり并三の火雷を氣毒神思れ
 雷電を思り水閣と回祿せし思大伽藍を焼く

昔の昔は我ら
 山河の雲相と云く
 今もいふに昔より
 友磯西あはれくもん
 新形よりあはれず
 秋の形の融りんふ
 よろからくはれ
 あん常の融り
 けりんあはれくも
 ろののにおに身を
 けりれは侍人の人
 あれとてえし御と
 仰るあはれは思

新 昔は昔もあはれくも
 今世もあはれくも
 七文もあはれくも
 男中もあはれくも
 とは昔もあはれくも
 又身町人なまの風を
 乃ちとて武蔵と好む
 を好むの好む好む
 ゆくふりぬるが宮
 えかりがうー武蔵に

ひあもてはれ
 文あもてはれ
 右後火等とあはれ
 融りんとあはれ
 先試したの融り
 今もいふに昔より
 友磯西あはれくもん
 新形よりあはれず
 秋の形の融りんふ
 よろからくはれ
 あん常の融り
 けりんあはれくも
 ろののにおに身を
 けりれは侍人の人
 あれとてえし御と
 仰るあはれは思

今世もあはれくも
 七文もあはれくも
 男中もあはれくも
 とは昔もあはれくも
 又身町人なまの風を
 乃ちとて武蔵と好む
 を好むの好む好む
 ゆくふりぬるが宮
 えかりがうー武蔵に

其のまへに九果
 にて父母を割れ
 完を若く尾山
 空を若く海を
 其のまへに九果
 志を殺すべく
 善所を造り死
 人乃骨肉散礼
 世を豺狼を
 事く徳を
 其れを射る如
 一の心と心と
 以て眼を

其のまへに九果
 其れを射る如
 一の心と心と
 以て眼を

其のまへに九果
 其れを射る如
 一の心と心と
 以て眼を

其のまへに九果
 其れを射る如
 一の心と心と
 以て眼を

ちるう年経る後
 可人ありまて
 日遊の影はあ
 付るあ面の影
 ちるう年経る後
 可人ありまて
 日遊の影はあ
 付るあ面の影

らんくやうも己廿日此悪因果縁
 形きくもの極め此不修亦悪因果
 程々の身にたりて此大敵と亦同惡因
 果の事構せらるや此もむきも理至極
 ちりある時を此惡因果あわして消滅
 する事をゆんや修りにあはれん
 元來八宗九宗とも實母を宗者此根木
 徹底會得の位に到せば此惡業あはれん
 消滅とてこれ今世の生信高増
 唯らる程の出家あくとも其宗方の根木

手宗証をよま
 らんふん及ん
 程の事あは
 ちあやうく
 新あんふん
 ちあやうく
 世よかりく
 かく日びん
 此れ新かり

徹底一是非此外に遊戯も程の信も
 由りたり此や信人此のくち
 故に信人として此惡因果消滅の事
 他たりゆへに此佛乃加護力にあつ
 されば消滅とて一志のくちも此力業
 力にりて此の信せば業力も其信
 無二此大力なるもの故に佛の加護力なり
 だけ消滅なりかへ此に在法滅れ
 至心此佛此真念を唱へ念はれ功は
 ちせば此佛乃加護力なり此

新室の五つに
 宝蔵の印施の光
 唯まこれ猶れ
 一奉しやま
 亦おまなきま
 其の海をの
 かり念仏の
 大願の
 徳なり何事
 下になきま
 きた他家の
 ほりて我々の
 法を改め

勤る一毛以人を恨みず
 不動智とも不動明王
 此の真理を觀し
 唯死に志すと念ず
 此も殊く
 同講せらるる
 て分け死の道

志すま
 あひま
 大徳の
 廣く
 とく
 一
 海を
 亦
 其の
 かり
 大願
 徳
 何事
 下に
 きた
 ほり
 法

志すま
 あひま
 大徳の
 廣く
 とく
 一
 海を
 亦
 其の
 かり
 大願
 徳
 何事
 下に
 きた
 ほり
 法

小のりて申れ海の
 流れけけに心
 心もわかれり
 小隙がすきひ
 儂のありと大

今世の心懸ふ道中とむくあらば
 善悪かろのれ仕古も終身は今日と願
 精勤を身と心懸ふと申一善悪と教
 善悪先中二に家のさあ子孫のあ己
 名れおふあろばや我場小せわく
 法馬さや中く討死をまや又く
 かやや花別ちた日あつて
 中や心無常迅速の影を能く
 けり付ら公私あつて
 けり付ら公私あつて
 けり付ら公私あつて

二つふが
 小のりて申れ海の
 流れけけに心
 心もわかれり
 小隙がすきひ
 儂のありと大

今世の心懸ふ道中とむくあらば
 善悪かろのれ仕古も終身は今日と願
 精勤を身と心懸ふと申一善悪と教
 善悪先中二に家のさあ子孫のあ己
 名れおふあろばや我場小せわく
 法馬さや中く討死をまや又く
 かやや花別ちた日あつて
 中や心無常迅速の影を能く
 けり付ら公私あつて
 けり付ら公私あつて
 けり付ら公私あつて

法華の心だらに
乃南無観世音
唱う言経并説き

おけしを金うと故し
此理たりと心
申すし辯明し
修す我々其所要也

新撰此咒書ありて
乃人此呪を志す
或人同其事を月蓮
字なり念仏の如き
滅の事も念仏の如
唱ふれん法華經を
念仏の如きと建す
念佛と念せざるべ
いさあるを利す
修す我々其所要也

山野と法華とす
法華の心だらに
乃南無観世音
唱う言経并説き
新撰此咒書ありて
乃人此呪を志す
或人同其事を月蓮
字なり念仏の如き
滅の事も念仏の如
唱ふれん法華經を
念仏の如きと建す
念佛と念せざるべ
いさあるを利す
修す我々其所要也

世古今雜言集古今見聞表
 幸誠輯見言又已之意を述滅後
 同爰乃如さるも也や書りおし地
 若事れはらや情弱悔念の生得
 かり志事りしは福の幸もなきは
 和情れ又を也事りす存ふ又意
 書體も流る形くおるも幸の
 ぬくあやぬるも是はゆゑ人
 情くおるも福ひえらるも

